

〈実践研究〉

保育・教職実践演習における保育実践に関する研究

——情報機器を活用した教材研究と模擬保育を通して——

太田 顕子*, 香田 健治*

A Study on Practical Exercises of Early Childhood Education and Teaching Profession
——Through Teaching Material Research and
Simulated Childcare Using Information Equipment——

Akiko Ota and Kenji Koda

I 問題の所在と研究目的

1. 幼稚園教諭・保育教諭に求められる資質能力と保育・教職実践演習

文部科学省は2017年5月、一般社団法人保育教諭養成課程研究会に委託した「幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究」を発表した。それによれば、これからの時代の幼稚園教諭に求められる資質能力は不易とされる資質能力に加え、「必要に応じて幼児の体験と関連させながらICTを活用し、幼児の体験を豊かにしていくことや、教員一人一人がカリキュラム・マネジメントに参画していくなどの新たな課題に対応できる力量」、さらには組織的、協働的に諸問題を解決できる力と示している¹⁾。

ICT活用については、小学校でのプログラミング教育の必修化や、プログラミング的思考を養うことを目的とした教育が始まっており、保育者養成校においても情報機器活用の取り組みが徐々に進められている。例えば保育内容言葉の領域では、電子紙芝居の活用²⁾、また健康領域におけるダンスのYouTube³⁾公開等が見られる。しかし、それはまだ限られた領域での取り組みにとどまっているのが現状ではないかと考える。

一方、養成段階の総仕上げともいえる保育・教職実践演習の授業では、教職実践履修カルテの振り返りの際に、実習の振り返りをグループワークとして行うことや、保育現場を想定した演習課題に取り組むなどの方法が、課題解決能力につながるということが報告されてきた^{4),5)}。また、自己課題の自覚と不足している知識や技能を補うために実施した模擬保育では、「安全面へ配慮した保育実践」や「子どもへの指導・援助の良し悪しに

についての振り返り・省察」「職員間連携のスムーズさ」など、具体的な課題に学生が気付くといった点を指摘している⁶⁾。つまり、保育・教育実践演習では、実践的な学びの中で、学生が自らの課題を発見し、その解決の糸口を探るための授業がなされてきたといえる。

したがって、保育・教職実践演習においては、情報機器を活用した演習課題に取り組むことを通して、課題解決能力を育成することも必要となるといえよう。

そこで本研究では、保育・教職実践演習の授業における模擬保育に情報機器を活用した教材研究を取り入れ、保育者に求められる情報機器に関わるスキルと認識、さらにカリキュラム・マネジメントに参画するための新たな課題に対応できる力量育成の手がかりを探ることを目的とする。

2. 幼児教育施設における情報機器の活用状況

本題に入る前に、保育現場に情報機器を取り入れている事例についてみておこう。岩淵(2019)は、情報機器を活用した身近な自然の動植物の情報を入手することが可能になるシステム開発をして、自然への直接体験につながる事が出来る幼児の遊びになるかを把握することを目的に、身近な自然の動植物に関する情報を集めた図鑑について、情報機器を活用する「さとやまたんけん」のシステムの開発した上で幼稚園の5歳児が実際にどのように遊ぶか調査した。その結果、タブレットのカメラ機能を使用して、QRコードを読み込み、希望する動植物の写真を表示し写真を見て、園庭などに生息していた植物について会話を楽しむなど情報機器を活用した身近な自然環境に関する間接的体験の遊びが、直接体験の興味・関心へつながることを示した⁷⁾。

受付日 2022. 5. 20 / 掲載決定日 2022. 9. 28

*関西福祉科学大学 教育学部 准教授

また、二宮・富士 (2019) は、「プレゼンタイム」の教材として、あらかじめ保護者が撮影したデジタルカメラの画像をプロジェクターでみながら、子どもが自分の体験を説明するという保育園での実践事例を紹介し、子どもの育ちについて分析している。その結果デジタル画像を補助的に用いながら、言葉によるやりとりが成立するプロセスが見出されたことや、語り手となった子ども自身が、主体的に、クラスメイトを聴き手として意識しながら、相手との対話が成立する「語り方」を試行錯誤し、習熟していくという効果がみられたと述べている⁸⁾。

2つの研究からも読み取れるように、子どもは柔軟に情報機器を遊びの中に取り入れて興味のあることを探求したり言葉で伝えたりすることを成熟させていくなど、様々な方向で学びを深めている。小学校でプログラミング教育の必修化や、プログラミング的思考を養うことを目的とした教育が始まっている現在、情報機器の活用を特別なものと扱わず、保育現場においても柔軟に取り入れることができれば、更に様々な可能性が広がるだろう。しかしながら、子どもの興味・関心に応じて保育者がどのような方法で情報機器を活用していくのかは、保育者の情報機器に対する認識の差や情報機器を操作するスキルの差などもあり、保育者個々の力量が問われてくるのである。

II 研究対象と方法

1. 対象

本研究における研究の対象は、「保育・教職実践演習(幼稚園)」を受講する教育学部教育学科子ども教育専攻の4年生19名である。倫理的配慮として、学生には授業内容の説明とともに、本研究の趣旨を説明し、研究への協力が評価と関係しないこと、個人が特定されることはないなどの個人情報の取り扱いなどを説明し同意を得た。

2. 方法

(1) 教材研究と模擬保育の説明

情報機器を活用した教材研究を行うにあたっては、①3～5歳児を対象とすること、②子どもが保育の中で体験する事柄や、遊びや生活の中で興味をもっている事柄を題材とすること、③Microsoft Office PowerPointを用いて教材を作成すること、をあらかじめ提示した。教材の具体的内容については受講生19名を6グループに分け、1グループ3～4名で、作成することとし、情報機器活用の意義について説明する際、『幼稚園生活では得難い体験を補完するなど、幼児の体験との関連を考慮す

る』という幼稚園教育要領解説の内容を紹介した。授業回数は全7回で、計画立案と教材作成に3回、学生間での発表と発表内容への意見交換に2回、振り返りに2回配分した。

また模擬保育の方法としては、発表者以外が子ども役になり参加することとした。また、子ども役として参加したのち、子どもの視点で感じたことや保育者に対する意見などを自由記述でコメントし、発表者にフィードバックする方法をとった。

(2) PMIT シート作成と KH Coder による分析

情報機器を活用した教材の可能性、現段階における学生の情報機器に対する認識、保育者に求められるスキルなど、実践の振り返りによって、どのようなことに学生が気づき自らの課題としていくのか、本研究では、PMIT シートの作成を行うこととした。具体的には、全グループの発表を終え、それぞれが良かったと思う点や改善点など自分たちの考えと、発表時に子ども役の学生から得たコメントを照らし合わせて省察した。本研究では、Plus (継続すべきよかった点)、Minus (やってきたことの中での問題点)、Interesting (おもしろいところ、関心事や疑問)、Try (次に向けてやってみたいこと) について、付箋紙を活用して模造紙にまとめている。

シートの項目である「良いところ」と「関心のあるところ」をポジティブな気づきの項目、「問題点」と「課題」をネガティブな気づきの項目とに分け、データ含まれた単語やその頻度から、この保育実践を学生がどのように受け止めているのかみるため、テキストマイニングのアプリケーションソフトである、KH Coder で分析を行った。KH Coder は樋口 (2014) が開発した、計量テキスト分析ができるツールである⁹⁾。計量テキスト分析とは、計量的分析手法を用いてテキスト型データを分析し、内容分析を行う方法である。KH Coder から類出された語彙について共起ネットワーク分析を行い、共起された語がどのように繋がっているのか可視化した。その共起がどのような状況で起きているか確認するため KWIC (Key Word In Context) コンコーダンスを確認しながら考察を加えることとした¹⁰⁾。分析については、それぞれの共同研究者が行い、信頼性を高めるため、結果をもとに研究者間でモデレーションによる協議を行い、結論付けた。

III 結果と考察

1. 学生の教材研究と開発

計画立案と教材作成等の準備期間として、授業を3回、模擬保育発表として授業を2回、振り返りに2回の

表1 各グループの教材の内容

タイトル	内容
第1グループ 乗り物クイズ	身近な乗り物を示してどこで見たかや、名前を答える。
第2グループ これなんだ	動物、食べ物などシルエットをヒントとして出し、名前を答える。
第3グループ これでいいのかな	基本的な生活習慣の良いものと悪いものを同時に見せて、○か×で回答する。
第4グループ まちがいみつかるかな	2枚の画像を比較してどこが違うのかを答える。
第5グループ どうぶつクイズ	動物のシルエットから名前を答える。
第6グループ なにができるかな	野菜の花の画像を見て、どんな野菜になるか答える

計7回の時間をとり、保育・教職実践演習の中で行った。次の表は各グループが Microsoft Office PowerPoint で作成した教材の内容である。表1のように全グループがクイズ形式での出題の形を採用した。

内容については物の名前をカテゴリーに分けてクイズで紹介したり、野菜の花を見せ、どんな野菜ができるか、ヒントを与えながら考えられるようにしたり、拡大画像を見て何の写真なのか想像したあと全体画像を出すなど、様々な出題の方法が試されていた。もの名前を当てることに焦点を当てたグループもあれば動植物への興味や関心をねらいとしたグループもあった。

具体的な教材作成のプロセスについて、第3グループの取り組みを例として取り上げる(表2)。第3グループのテーマは『これでいいのかな』という生活習慣をテーマとした内容の教材作成であった。グループの学生への聞き取りと、計画メモをもとに準備期間の3回の内容を紹介する。

第3グループの3回の準備期間の取り組みを追うと、学生らが自ら①子どもの発達課題を捉え、②それに対する効果的なアプローチ方法を考え、③情報機器を活用した効果的な方法で教材にしようとするプロセスが見えてきた。

次に実践後の『振り返り』について触れておく。振り返りの授業は2回設けた。そのうち、1回目はまずグループ内で自分たちの保育について気づいたり学んだりした点を話し合った。実際に第3グループが行った振り返り評価のグループ討議の記述内容を紹介する。

評価として挙がってきた意見は、表3のように大別すると、情報機器の活用に関する内容と、保育者の役割に関する内容の2つに分類できた。この記述を見ていくと、リハーサルや準備の段階では見えなかった、実際に模擬保育を行ってみて初めて得られた気づきや学びが語

表2 第3グループの計画立案と教材作成(計3回)

第1回授業：教材のテーマ・対象年齢に関する話し合いの内容
手洗いうがいの徹底、マスクの着用など、幼児にとって難しい生活習慣の定着が求められているが、特にマスクなど自分で常にきちんとできているのか確認するのが難しいこともあるので、画像を見ながら気づけるような教材を作ってはどうかと協議する。対象年齢を特に3~4歳の子どもとして、まだ十分に生活習慣が身につけていない子どもたちが楽しみながら学べる内容にすることを話し合いの上、決定した。
第2回授業：教材の具体的な内容検討と出題方法、作成について
楽しく学べるように、簡単なクイズ形式にする。子どもが間違いに気づきやすいように、クイズは解答式ではなく、○×で択一式にする。グループ全員で、パソコンのフリー素材の画像を検索する。正しい行動かそうでない行動かが、子どもに一目瞭然に分かるような素材を選択し、グループ全員で検討する。並べて画像をスライドに載せるため、取り込んだ画像の大きさも調整する。生活を振り返るという意味で、1日の生活の時間の流れを意識する内容にすることを協議の上決定した。正解を出すときには PowerPoint のアニメーション機能で、正解だと分かりやすいような効果や工夫を加えるというアイデアも出た。
第3回授業：教材の完成と模擬保育に向けての計画
グループ内での役割分担と進め方について話し合い、実際に時間を計りながらリハーサルを行う。子どもの前でやることを想像したとき、いきなり始まったのでは子どもが活動の趣旨を理解しにくいと予想されることから、導入として『ひとりでするかな』という生活習慣の絵本を読むことを決める。PowerPoint はリズムよく、画面を切り替えられるようにタイミングを話し合っておく。

表3 学生自身の気づき

情報機器の活用面	保育者の役割
<ul style="list-style-type: none"> イラストのサイズが小さくて見えにくかった。大きくすると画像が粗くなる為、難しいと感じた。 イラストが何を示しているのか、絵が分かりにくいということが、子ども役の人の反応で分かった。 スライドの示し方が単調でもう少し工夫しても良かった。 途中飽きてくるような様子もあり、内容をもう少し詰めておけばよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 絵本が終わってクイズが始まるまでの流れがスムーズでなかった。 発表をしている人以外の役割をもっと明確に決めておけばよかった。 緊張すると早口になってしまう。 みんなが楽しめるように声かけがもっとできるとよかった。 発表している以外の人も、子どもが楽しい気持ちで参加できるように、拍手をして盛り上げたりする必要があると思った。

られていることが分かる。

さらに、自らの評価と、模擬保育に参加していた学生の感想を合わせて再検討したのが、振り返りの2回目である。2回目の振り返りでは、模擬保育に参加していた学生のコメントと自分たちのコメントを合わせて再考し、PMCT シートの作成を行った。以下は PMCT シー

トの分析結果である。ここからは、全グループの記述内容を分析し、学びの内容や傾向をみていく。どのグループにも、情報機器の活用面に関する気づき、保育者としての気づきの両方が見られた。

2. 情報を活用した保育実践における分析結果と考察

(1) 頻出語の比較

PMIT シートの項目である「良いところ」と「関心のあるところ」をポジティブな側面の項目として、また「問題点」と「課題」をネガティブな側面の項目として分け、テキストマイニングを行った。

まず、ポジティブな項目とネガティブな項目で、頻出語にどのような違いがあるのか、見ておく。

ポジティブな項目における頻出語は、①PowerPoint、②工夫、③楽しい、④問題 (クイズ)、⑤絵本、⑥分かる、⑥導入などであった。その語の意味について、前後の文脈から見ていくと、「いきなり問題が始まるのではなく、導入があったのが良かった」など、工夫したことに対する評価の内容がみられた。反面、実践がうまくいったというよりも、例えば「PowerPoint の示し方ひとつで、見る側の興味の示し方が変わってくる」や、「分かりやすいヒントを出すことで、子どもが楽しく参加できるようになる」等のように『こうすればよいんだ』という手がかりを得たことが、関心としてポジティブな項目に上がってきていることも分かった。

次にネガティブな項目における頻出語をみると、① PowerPoint、②工夫、③分かる、④声、⑤役割、⑥分担、⑦音 (音響効果)、⑧イラスト、などが挙がっている。頻出上位の PowerPoint 等は同じだが、全体の抽出語数も、ポジティブな項目より、ネガティブな項目の方が多い。ネガティブな項目の方がより具体的な指摘となっており、例えば「PowerPoint のイラストの大きさや画素数が揃っていないければ、見づらいので、もっと配慮が必要ではないか」や、「PowerPoint に示している、イラストが何を示しているのか、その意味が子どもに伝わらなければ、保育のねらいも伝わりにくい」など、どこに問題があるのか、意見をもっていることが伺える。また、保育者としての力量を問うような「小さな声で話すのではなく子どもたちに分かるようにハキハキと話す」や「グループで発表するなら、役割を明確にしておき、もっとスムーズに進行ができるように分担しておけばよかった」など、『この点が改善すべき部分である』という明確な思いが見えてくる。ポジティブ項目より、ネガティブ項目の方が多かったという結果から、学生が自身の模擬保育の実践や、学生同士の発表を通じて、自分の未熟な部分を見つめ、必要な力を見出だしていたことが

伺える。

(2) 共起ネットワーク図の分析

次に共起ネットワーク図について詳細にみていくことにより、学生の気づきがどのように生成されているのかを検討する。図 1 は、ポジティブな項目について、図 2 は、問題点と改善点などネガティブな項目に関する記述について、ネットワーク図で示したものである。これより、共同研究者 A と B がそれぞれ、ネットワーク図を分析する。

1) ポジティブな側面の分析 (図 1)

①共同研究者 A の分析結果

ポジティブな項目である「良いところ」と「関心のあるところ」共起ネットワークから、「保育の際の問題の出し方と工夫」「教材の工夫」「導入の工夫」「保育者の役割」の 4 つのカテゴリーを抽出した。

「保育の際の問題の出し方と工夫」では、「問題数がちょうどよい」や「難易度が少しずつ上がるなど飽きない工夫をしていた」「ヒントがあり分かりやすかった」など、子どもの視点でどのような気持ちでクイズに参加していたか想像した上で妥当であったと感じた理由などを記したもので構成されていた。

「教材の工夫」では「PowerPoint がカラフルで見やすかった」「イラストがとても分かりやすかった」など、PowerPoint に施された工夫についての記述とともに、教材の楽しさを伝えるための保育者にも注目されており、「保育者も楽しんで取り組んでいた」などの記述が複数にみられた。

「導入の工夫」では「絵本に出てきた乗り物が、スクリーンにも出てきて楽しめた」「絵本とクイズが関連していてさらに内容が楽しめた」など、クイズが突然始まるのではなく、クイズの内容に関連のある絵本の読み聞かせによりイメージを膨らませた上で、クイズが始まると子どもがより関心をもてるのではないかと感じている学生の記述が複数見られた。今回の 6 グループのうち、絵本による導入を行ってから PowerPoint 教材を始めたグループが 2 グループあり、いずれも学生間での良い評価を受けている。

「保育者の役割」では、「保育者が子どもに問いかけながら進めていた」「保育者が一人一人に関わろうとしていた」「保育者同士助け合いながら進めていた」など保育者としての姿勢が評価される記述がみられた。それと共に、保育の中で重要なこととして位置づけられている基本的な生活習慣や生き物への興味なども、保育者の働きかけによって興味をもてたのではないかと記述が複数あった。

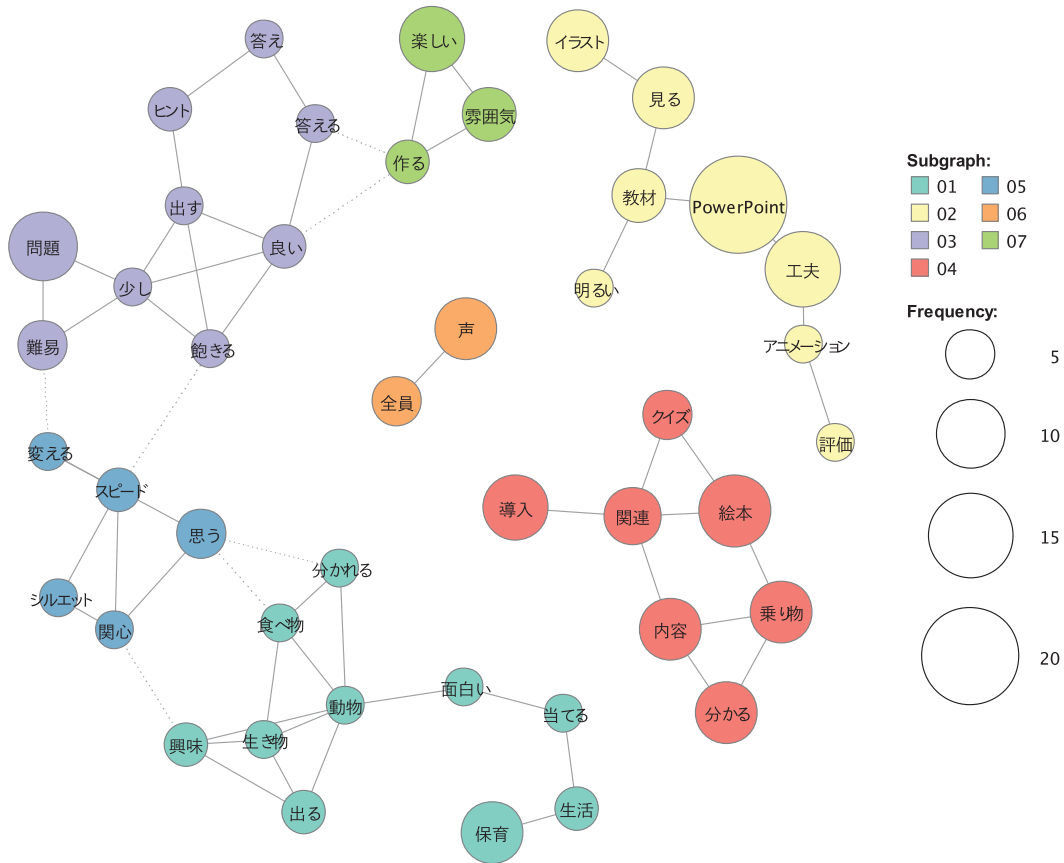


図1 ポジティブな側面に関する共起ネットワーク

以上、ポジティブな項目から生成された共起ネットワークには、子どもが楽しみながら知識を得ることができる情報機器を用いた教材づくりの在り方を模索する学生の姿が見えてきた。またそれだけでなく、実際に子どもで行う時に注意すべき点、更に環境としての保育者の役割、具体的な働きかけについても、気づくことができていた。

②共同研究者 B の分析結果

分析の結果は、以下のとおりである。すなわち、第1に、「内容の関連性」である。それは「課題内容が子どもの生活と関わる内容であった」「導入と内容との関連性があったよかった」「絵本でいろいろな種類の乗り物が登場していたため、内容がさらに分かりやすかった」「子どもたちの生活と保育の関連性」等の記述から保育活動の連続性だけでなく、子どもの興味・関心、生活との接続、保育内容を意識していることが分かる。

第2に、「教材研究」である。「食べ物、乗り物などジャンルに分かれて統一していたのが工夫されていると思った」「食べ物と動物に分かれてよかった」「食べ物や生き物などで質問をしていて、次は何が来るかわくわくしたのがよかった」等、「食べ物」「乗り物」「動物」という子どもの興味・関心の実態を捉えた教材を準備してい

る。また、教材と教材を関連させた教材を開発していることが分かる。

第3に、「教材（スライド）の工夫」である。「PowerPointが見やすかったカラフルだった」「色彩豊かでPowerPoint自体見やすかった」「スライドのアニメーションの工夫がよかった」「(スライドのアニメーションを) スピードを変えたり、何回も見せられるように工夫していたところ」等の記述から保育実践においてアプリケーションを活用して、色の使い方、アニメーションの設定などのICTに特化した教材の工夫が散見される。

第4に、「子どもへの支援」である。「親しみやすい声かけを行っていた」「子どもの答えに対して、子どもの目線で声かけできていてよい」「最後の声かけがよかった」等の記述から、教師の役割としての指導・援助の在り方のよさが見られる。

このように、情報活用に関するよさだけでなく、子どもへの指導や内容の充実を図っていることをよさと読み取る。これらは、子どもの自発的な教育実践をする上で、幼稚園教育要領に示される「教材の工夫し、物的・空間的環境を構成する役割」と、「幼児と適切な関わりをする役割」の具現化されたものであるといえよう。

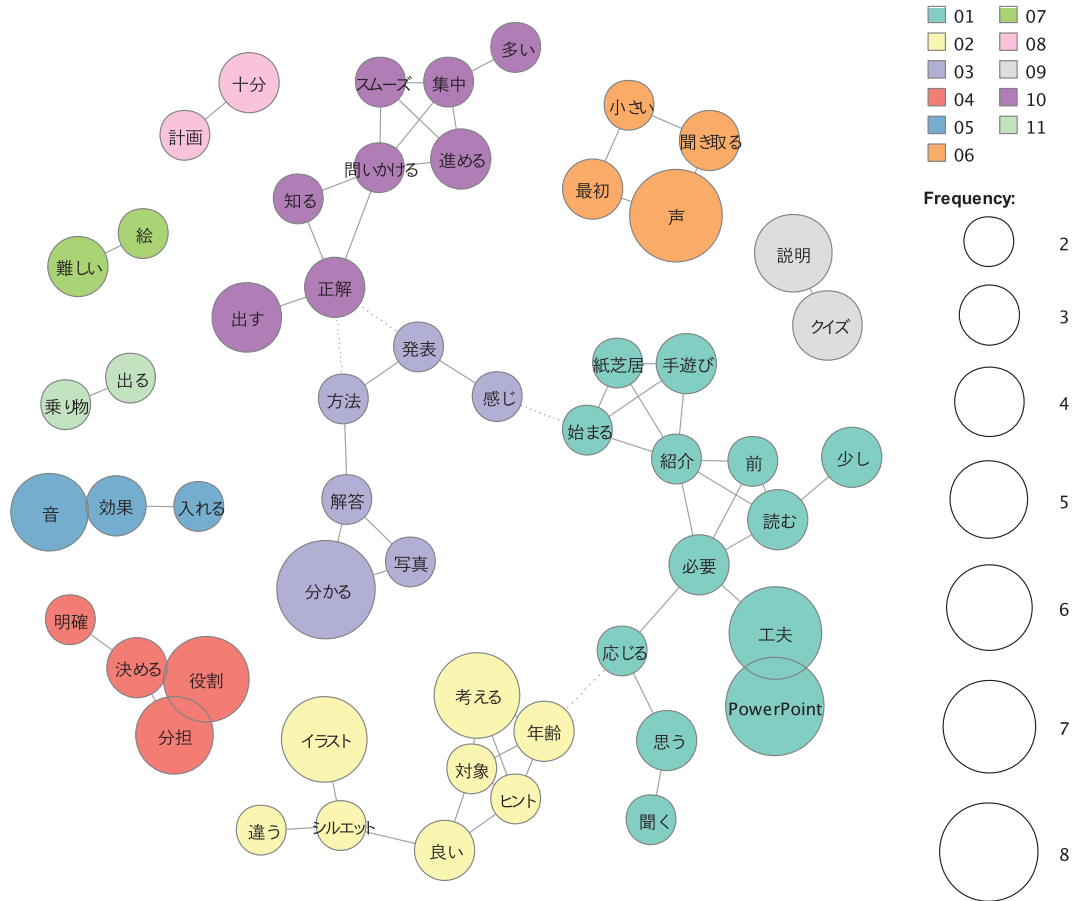


図 2 ネガティブな側面に関する共起ネットワーク

2) ネガティブな側面の分析 (図 2)

①共同研究者 A の分析結果

次にネガティブな項目である「問題点」と「課題」で生成された共起ネットワークを見ていく。この図からは「保育の際の問題の出し方と工夫」「教材の工夫」「保育者の協働」「声の大きさ」「保育者の態度・役割」の5つのカテゴリーが抽出された。

「保育の際の問題の出し方と工夫」では、「もっとわかりやすいヒントを出すなどの工夫が必要」や「正解の説明などもっとわかりやすく」「分からなかった子どもがいると思う」など、子どもが理解しづらいのではないかと、もっと分かりやすく示すべきではないか、といった意見が多数あった。

「教材の工夫」では、「イラストが小さい」「難易度の並べ方がバラバラ」「分かりやすい効果音を入れるなどした方がよい」「年齢に応じたものにする」などの意見が目立ち、学生が子どもの発達段階や、理解に応じた教材を作ることの大切さに気づけたのではないかと示唆される記述が目立った。

「保育者の声」では、「最初の声かけが聞き取りにくかった」「声が小さくて聞き取りにくい」「子どもに聞こえ

やすいよう大きな声で話した方がよい」「保育者の棒読みが気になる」「話すテンポが速すぎて聞き取りにくい」など実践したことによって得られた感想が挙がっており、環境としての保育者が適切な声量、スピードで語り掛けることの大切さに気づいた事が窺える。

「保育者の協働」では「事前の準備をもっと綿密に行う」「役割分担を明確に決めておく」「連携を取りながら保育を行うようにしていきたい」「照れや恥を捨てて保育者として子どもの前に立つ」などが挙がっていた。本実践では学生が子ども役として参加したため、保育者役の学生が緊張感を十分にもてなかった点は否めない。しかしながら、子ども役の学生らは、子どもの視点で客観的に保育者の望ましい姿を求めており、保育者役の学生らも振り返りの中で保育者としての自分の姿に気づくなど、相互に学びが得られた。

「保育者の態度・役割」では「絵本を読むのが早口であった」また「PowerPoint の間のつなぎで何か話した方がよい」「場面に応じた言葉がけが必要だったと思う」「必要に応じた説明の仕方をする」「いきなり始まった感じがしたので、子どもの表情をもっと見た方がよい」などが挙がっていた。場面に応じた声掛けの必要性に代表

されるように、保育者として、どのような配慮や援助をすべきなのか、考えるきっかけとなったと推察される。

②共同研究者 B の分析結果

分析の結果は、以下のとおりである。すなわち、第1に、「子どもの主体性を意識」である。それは「正解の説明など子どもに聞く工夫が必要だった」「絵本を読む前の紹介などの工夫が必要だった」「正解の説明など子どもに聞く工夫が必要だった」等の記述から、子どもの実態を理解し、より子どもの興味・関心を引き出し、能動的に活動できるようになっていない点が問題であるといえる。

第2に、「導入の工夫」である。「導入が少し詰まってしまう、もう少し段取りを考えるべきであった」「導入をもう少し考える」「手遊びなどの軽い導入があった方がよかった」「手遊び紙芝居が唐突に始まったため、どのような内容が登場人物を紹介、説明するとよかった」等の記述から、保育活動における子どもの興味・関心を高めるための導入の工夫が必要であることを課題としている。

第3に、「子どもへの対応」である。「個人に聞くのではなく、分かった子に問う方が子どもを楽しくできると思う」「正解の説明など子どもに聞く工夫が必要だった」「最後の声掛けがよかった」等の記述から、教師が育成する子ども像を意識できていないことが問題であると捉えられる。

第4に、「スライドの効果」である。「PowerPoint のアニメーションがゆっくりだった」「PowerPoint の分量がもっと多いほうがよい」「効果音などもあればよかった」「動くときに音があればよかった」「効果音を入れる」「音をつける」等、アプリケーションの効果を活用に関する記述が散見される。この点については、アプリケーション機能の理解が不十分なことが原因であると考えられる。さらに、今後は、効果的な活用法について考えることも必要となる。

第5に、「保育者の連携・分担」である。「3人の役割分担がきちんと分らなかった」「役割分担を明確に決めておく」「保育者が役割をきちんと決めて打ち合わせをする」「役割分担をしっかりと行う」「進め方や役割分担を決めておく」「保育者の連携をもっとスムーズにする方がよい」「映像と司会の連携の悪さ」「連携を取りながら保育を行うようにしていきたい」等、教師の協力については、学生にとって経験知として十分でないことが要因であると推察できる。

3. 共同研究者によるモデレーション

本研究では、研究の信頼性を向上させるために、各共

同研究者が分析した結果をもとに、モデレーション¹¹⁾による協議を実施することとした。

(1) ポジティブな側面の分析

共同研究者 A (以後「A」という。)は、ポジティブな側面において「保育の際の問題の出し方と工夫」「教材の工夫」「導入の工夫」「保育者の役割」の4つにカテゴリー化している。共同研究者 B (以後、「B」という。)も、「内容の関連性」「教材研究」「教材(スライド)の工夫」「子どもへの支援」と、同じく4つにカテゴリー化していた。

両者の分析内容の詳細をみていくと、Aのいう「保育の際の問題の出し方と工夫」「教材の工夫」「導入の工夫」とBのいう「内容の関連性」「教材研究」「教材(スライド)の工夫」は協議の結果、共通性が見られた。したがって、教材に関する評価がまとめられているものであったため、『教材研究や工夫』と概念化した。なぜなら、実際に教材を作成する中で、スライドの作成方法や、分かりやすい提示方法などを学生は考えていたからである。また、計画の際に学生に伝えていた『情報機器を活用する際には、幼稚園生活では得難い体験を補完するなど、幼児の体験との関連を考慮する』という点においても、様々なグループの教材の提示方法を見ることで子どもの視点に立って教材を考える機会となっていたからである。

またAの挙げている「保育者の役割」は、Bのいう「子どもへの支援」と内容が一致しており、学生が保育者としてどのような配慮や援助を行うことが、子どもの育ちにつながるか、保育者の役割について考えたものとして『保育者の配慮や援助』と概念化した。この点は特に模擬保育を通して得られた学びであると考えられる。子ども役になることで一人ひとりの子どもを大切に、保育を進めていく上での保育者の配慮や援助などを学んでいる。また特に注目すべき点として「保育者同士があらかじめしっかりと話し合っておくことが必要」「役割をきめておく」など働く上での協働性の大切さに気づいたことが成果であると考えられる。保育を計画する際、自らの実践がどうだったか省察しそれを次の保育へと反映させていくPDCAサイクルの考え方が必要となる。本実践において、他者の保育も見る中で省察する態度の芽が養われたと言える。

(2) ネガティブな側面の分析

次に、ネガティブな側面について両者で検討した。Aは、「保育の際の問題の出し方と工夫」「保育者の声」「教材の工夫」「保育者の協働」「保育者の態度・役割」

とカテゴリー化している。一方、B は、「子どもの主体性を意識」「導入の工夫」「子どもへの対応」「スライドの効果」「保育者の連携・分担」とカテゴリー化している。

これらについて協議を行った結果、「保育の際の問題の出し方と工夫」「保育者の声」「保育者の態度・役割」「子どもの主体性を意識」「導入の工夫」「子どもへの対応」を共通のカテゴリーとし、子ども一人一人の特性を的確に把握し、理解することを意味することから、これらを『子どもとの適切な関わり』と概念化した。そして、「教材の工夫」「スライドの効果」を共通のカテゴリーとして「教材を工夫し、環境を構成する役割」と概念化した。さらに、「保育者の協働」「保育者の連携・分担」を共通のカテゴリーとした。子どもを育てていくためには、保育者が協力して一人一人の実情を捉えて、教師同士が日頃から連絡を密にする¹²⁾ことを求めていることから、「保育者間の協力体制」と概念化した。

IV 総括と今後の課題

本研究では、保育・教職実践演習の授業における模擬保育に情報機器を活用した教材研究を取り入れた。模擬保育で得た学生の気づきや学びは、保育者に求められる情報機器に関わるスキルと認識、さらにカリキュラム・マネジメントに参画するための新たな課題に対応できる力量育成の手がかりとなった。

PMIT シートは、実践を通じての自己評価と他者からの評価を総合して作成したものだが、テキストマイニングによる抽出語数を比較すると、ポジティブな項目より、ネガティブな項目の方が多かった。この結果から、学生が自身の模擬保育の実践や、学生同士の発表を通じて、子どもとのかかわりとの関係から自分の未熟な部分を見つめ、自己課題を明確に把握し、『どうすればよかったのか』と考える姿勢が見いだせる。

また共起ネットワーク図から、以下のことが明らかとなった。

第 1 に、ポジティブな側面である『教材研究』、ネガティブな側面である『教材研究や工夫』について、両者とも「教材研究を通して、幼児と教材の関わりについて理解を深め、遊びが展開し充実していくような教育環境の創造」¹³⁾、つまりカリキュラム・マネジメントに繋がる見方が認められた。

第 2 に、ポジティブな側面における『保育者の配慮や援助』とネガティブな側面における『保育者間の協力体制』については、両者が「幼児一人一人を育てていくためには、教師が協力して一人一人の実情を捉えていくこと」¹⁴⁾と「教師同士が日頃から連絡を密にすること」¹⁵⁾の

重要性に気付いており、施設の保育が組織的、協働的営みであることを再認識している。

第 3 に、『子どもとの適切な関わり』については、幼児教育において、子どもの自発的な遊びを中心とした教育を実践することが何よりも大切であるとしている¹⁶⁾。子どもの自発的な遊びを促すためには、学生の学びをカテゴリー化した「子どもへの対応」「子どもの主体性を意識」が重要な要素であり、それに学生は気付いている。

第 4 に、「情報機器の活用」についてである。情報活用については、ポジティブな側面として、アプリケーションに関する知識・技能を身に付け、それを教材研究や模擬保育に活用する必要性に気づいている。しかしながら、これらは、ネガティブな側面からも理解できる。このような要因としては、アプリケーションに関する知識・技能の習得が不十分であるため、その活用が限定的になっているといえよう。したがって、情報機器を活用した教材研究と保育実践を往還することによって情報機器の活用ならびに指導力の向上を図る必要がある。

このように、保育・教職実践演習における教材研究ならびに保育実践を通して、学生は保育者としての役割である「幼児の主体的な活動としての役割」「保育者間の役割体制」が身に付きつつある。また、保育者として必要視されるカリキュラム・マネジメントの第 2 要件である PDCA サイクルによる授業改善を行う方法を身に付けるための経験知となったといえよう。自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識・技能等を補い、その習得や改善を図ることが、次に繋がる学びなのである。ただし、情報機器に関わる知識・技能については、学生自身が必要であると認識したが、そもそもの経験不足が否めない。今回の取り組みのように、子どもの実態を想定し領域の枠を超えて柔軟に作成する経験をこれからも様々な授業の中で取り入れていく必要があり、この点については今後の課題とした。

謝辞

本研究の一部は、令和 3 年度関西福祉科学大学研究助成の補助を受け遂行しました。ここにお礼を申し上げます。

註

- 1) 一般社団法人保育教諭養成課程研究会「平成 28 年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究－幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える－」平成 29 年、pp.4-5。
- 2) 小山優子・矢島毅昌・梶間奈保 (2022)「保育者養成における『教職実践演習』の取り組み (2)－保育者の資質向

- 上につなげる模擬保育のあり方」高根県立大学 松江キャンパス研究紀要第 61 号、pp.39-48。
- 3) 中西一弘 (2021) 「保育者養成課程における ICT (情報機器) 活用の実践：領域「健康」の指導法への応用を念頭に置いて」淑徳大学短期大学部研究紀要第 63 号、pp.49-57。
 - 4) 森光義昭・関聡 (2012) 『保育・保育・教職実践演習 (幼稚園) の授業展開と課題』久留米信愛女学院短期大学紀要第 35 号、pp.57-66。
 - 5) 藤本明美 (2019) 『『保育・教職実践演習』において保育学生が主体的・対話的に保育観を省察する授業デザイン』神戸教育短期大学教育実践研究紀要第 1 号、pp.19-29。
 - 6) 神谷勇毅 (2017) 「保育者養成校における情報学の授業展開－電子紙しばい制作を通じた保育 ICT 活用理解」鈴鹿大学短期大学部紀要第 37 号、pp.167-173。
 - 7) 岩渕善美 (2019) 「幼児教育における ICT 機器を活用した子どもの遊び－身近な自然の動植物図鑑のシステム開発とタブレットを用いた遊びの実践－」平安女学院大学研究年報第 20 号、pp.43-52。
 - 8) 二宮祐子・富士大士 (2019) 「保育園における ICT を活用した幼児教育と子育て支援－デジタル・ストーリーテリングとしての言語活動－」子どもリサーチネット <https://www.blog.crn.or.jp/report/02/268.html> (取得日 2021 年 5 月 25 日)
 - 9) 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版。
 - 10) KWIC コンコーダンスは、共起ネットワークに表示された関連語句をクリックすることによって、関連語句とその前後の文脈があわせて表示される。
 - 11) モデレーションとは、評価の質を高め、一貫性を確保するための方法を示すものであり、具体的には評価者への訓練や評価者間の討議、評価基準の共通理解、事例の提供、評価機関による調査や結果の承認などをいうものである。
 - 12) 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 p.43。
 - 13) 文部科学省、前掲書 12)、p.41。
 - 14) 文部科学省、前掲書 12)、p.43。
 - 15) 文部科学省、前掲書 12)、p.43。
 - 16) 文部科学省、前掲書 12)、p.40。